

平成 25 年度教職大学院派遣研修研究報告書

派遣者番号	25K13	氏 名	大熊 一滋
研究主題 —副主題—	子供の眼を輝かせることができる教師の育成 —「視点スイッチトレーニング」の開発を通して—		
所属校	大田区立田園調布小学校	派遣先	東京学芸大学教職大学院

項 目	内 容
I 研究の目的	子供が眼を輝かせながら、自分で見つけた植物の名前を聞きにくる。そういった場面で、教師は、簡単に植物の名前を教えてしまうことがある。 ここに筆者は違和感を抱く。このとき教師は、確かに、子供の表面的な「知りたい」という欲求に応えることができた。しかし、子供が本来もっている純粋な興味・関心・思いを、受け止めた上での教師行動であったのだろうか。もし、この教師が子供と同じ景色を見て、子供と感覚や感性を同じくすることができていれば、教師行動は全く異なったものとなり、子供の眼は一層輝きを増していたのではないか、と思えたのである。 このような視点で教師行動を観察していると、「子供の眼の輝き」が失われている場面は、教育活動の中に日常的に存在していることが分かった。しかし、「なぜ、このような教師行動をとるのか」、「なぜ、子供の眼の輝きが失われていることに気付かないのか」といったことは分からず、論ずることもできなかった。さらには、この課題を解決するための研修を受けたこともなかった。 そこで、本研究では、子供の眼の輝きを失わせる要因と、その背景を明らかにするために、日常の教師行動の確認及び分析を行うことにした。そして、子供の眼を輝かせることができる教師を育成するための、研修プログラムの開発を目的とすることにした。
II 研究の方法	(1) 日常の教師行動の洗い出し及び分析 ① 暗黙知を形式知にすべく、ライフヒストリーの作成及び考察。 ② 創成研修校等における、「教師と子供との間に、感覚や感性、感情、思いなどの差異が生じているであろう」教師行動の観察。 ③ ②と同時に、教師及び子供、又はそのどちらかを対象としたインタビュー調査。 ④ 大学院課題研究チーム・グループの協働（以下、協働）により、80 以上のサンプルを分析。行動の背景、教師の心情・欲求を視点に、教師行動を分類・整理。 ⑤ 協働により、サンプルに共通する性質、子供と感覚や感性を同じくすることを阻害している要因の抽出、一般化。 (2) 研修プログラムの開発 ① これまでの研究成果から、プログラムのコンセプト「子供に入り込む」を決定。 ② 「子供が本来もっている純粋な興味関心、子供の思いを実感することができる」「研究成果物の価値として、すぐに、そのままの形で活用することができる」ことをねらいとした、研修プログラムの試験、シート内容の分析。 (3) 研修プログラムの実践及び検証 対象：都内公立小学校教員・教職大学院生及び教員、計 31 名

	期間：平成 25 年 12 月～平成 26 年 1 月 ① 研修及びアンケート調査の実施。 ② 研修受講者へのインタビュー調査。 ③ 協働により、記述内容の分析、研修の成果について考察。 (4) 課題研究の構成
Ⅲ 研究の結果	◎教師が子供と感覚や感性を同じくすること、子供に「入り込む」こと、を阻害する要因、優位性の確保 評価不安 浅薄な知識が明らかになった。 阻害要因①：優位性の確保 意識と無意識とを問わず、優位に在りたいという思いから、子供を「人格者として認めることができない・敬畏することができない」教師行動である。 阻害要因②：評価不安 同僚、管理職、保護者、子供からの「評価不安」。組織・身分への執着。「御身が何よりも大事」、「教えて認められたい」という思いが、子供の学びの場や探索行動などの制限につながっている。 阻害要因③：浅薄な知識 常識と教養の不足だけではなく、人間としての豊かさの欠如も含まれる。 ◎「入り込む」を「子供の視点で、子供の世界を体験することである」と定義。 阻害要因を適切に超越するために、「教師が自分の尺度や感覚、感性の限界、または誤りを認め、〈視点を転換する〉」ことができる「視点スイッチトレーニング」を開発。 ◎トレーニングシートの記述内容の分析―「子供と共に学ぶ」、「子供と同等になる」、「子供に戻る」、「傾聴する」、「謙虚さをもつ」、「安全の確保」、「教師の“ものさし”で見ない」といったことを受講者が内面化したと考えられる。 ◎受講後のアンケート結果の分析―「教師行動を見つめ直すきっかけとなった」、「今後の教師行動における視野が広がった」、「子供の頃にもっていた感覚や感性を思い出すことができた」全ての項目において、90%以上の受講者が研修の有意性を認めている。 「今後の教育活動において大切にしていきたいこと」、「研修全体を通しての感想」を聞いた記述部分は、「自己形成史の想起群」、「指導観群」、「課題の自覚群」、「他の教師の教師行動の振り返り群」に分類することができた。再現性、内面化ともに認めることができ、日常の教師行動の改善が図られるだろう。
Ⅳ 考察	教師が子供と感覚や感性を同じくすること、を阻害する三つの要因「優位性の確保」、「評価不安」、「浅薄な知識」が明らかになった。さらに、阻害要因の背景には、「謙虚さの欠如」、「“先生”という身分への執着」、「幼少期にもっていたはずである感覚や感性の忘却」等があることが分かった。 阻害要因を適切に超越しようとする意志をもつこと。ここに、「視点スイッチトレーニング」は成果を挙げた。自分の尺度や感覚、感性の限界または誤りを認め、子供に入り込むことができる教師は、子供と同様な学び手となり、新たな学びの場を創造することができる。そして、子供の眼を輝かせることができるだけでなく、子供とたくさんの幸せ、感動を、共にすることができるのである。 今後も、本研究並びに「視点スイッチトレーニング」の更なるブラッシュアップをはじめ、小学校教師に必要な資質能力とは何か、資質能力の向上を図るために何ができるのか、を現場の教師目線で、追究していく所存である。